毛沢東批判と日本の知識人　崩壊し始めた神話　東京新聞-1978.12.08

「毛沢東批判」と日本の知識人

崩壊しはじめた〝神話〟

問われる立論の真質

中嶋嶺雄

ダイナミックな「離陸」開始

去る十一月中旬を期して一挙に表面化した中国内政の当面の帰趨（きすう）がいかなるものであるにせよ、いまや明白な事実は、中国社会が毛沢東神話に閉ざされた世界からのダイナミックな「離陸」を開始しはじめたことである。それが「離陸」であるからには、それに先立つ「助走」がなくてはならない。想えば、永い道程であったとはいえ、それは、中国社会内部ではすでに着実に進行してきていたのであり、ある意味では一九六〇年代後半以降の中国の政治過程は、毛沢東路線の絶対化にたいする批判と抵抗のプロセスそのものであったといえよう。

「こうしていま、毛沢東神話が明示的にも崩壊しはじめたとき、一方で、毛沢東路線へのもっとも根源的な批判者であった彭徳懐の名誉回復が伝えられるのは、当然の成り行きでもあろう。

ターリン批判」のような衝撃的な偶像破壊は不必要だともいえよう。今日の事態はまた、胡愈の根源をすべて「四人組」に帰するという理不尽の破綻の証明でもあって、こうしてひとたび解禁された批判は、中国社会を必ずや方向づけてゆくであろう。

ところで、以上のような中国社会の方向性をとらえきれなかったばかりか、人類史の救済の種を毛沢東神話の世界に求めようとしたわが国の知識人がきわめて広範に輩出したことについて、有の現象ではなかったであろう。だが一方の毛沢東政治は、たんにその客観的な体質のみならず、より根本的には、中国社会における争点や葛藤が、中国の最近の躍新聞の表現を借りれば、まさに「社会主義的民主」の制度的保証によって溜飲されるという統治のメカニズムを欠き、一種の道徳主義的な大衆の教化を伴って著しくカリスマ化した権力構造のもとで、すべてが毛沢東個人の意向（しい）にゆだねられてきたところに問題があったのである。

こうした文脈において、毛沢東政治のユニークさは、権力闘争をつねに大衆運動化するという政治技術上の顕制でしかなかったという人的なものなのか、ペンクラブから協会への公式のものなのか、明確でない点もあり、三浦理事がペンクラブ側の真意を確かめたうえ、処理することになっていた。

この結果、申し入れが公式なものであることがわかり、理事会の方針どおり、研究会開催を断ったものです、経過報告は書記局報告の形式がとられ、了承された。

自明の問題点に盲目だった

だが、毛沢東神話に取り憑（つ）かれたわが国の多くの知識人は、ことに中国にかんするかぎり、このような自明の問題点にたいしてあまりにも盲目であった。この点では、イデオロギー的・党派的な毛沢東主義者よりも、多くの論壇時評者の言説に振らしただけで体制派詩人エフトシェンコの痛烈なアイロニーであったが、いまや世界からのダイナミックな「離陸」を開始しはじめたことである。それが「離陸」であるからには、それに先立つ「助走」がなくてはならない。想えば、永い道程であったとはいえ、それは、中国社会内部ではすでに着実に進行してきていたのであり、ある意味では一九六〇年代後半以降の中国の政治過程は、毛沢東路線の絶対化にたいする批判と抵抗のプロセスそのものであったといえよう。

「こうしていま、毛沢東神話が明示的にも崩壊しはじめたとき、一方で、毛沢東路線へのもっとも根源的な批判者であった彭徳懐の名誉回復が伝えられるのは、当然の成り行きでもあろう。

大いなる虚妄の文化大革命

それにしても、毛沢東政治の極限形態としての文化大革命は、まさに大いなる虚妄であったし、林彪の「自叙と没落」、「四人組」事件、華国鋒主席の権力掌握のパターンそれ自体が、毛沢東思想体制のもたらした過行現象の象徴的なあらわれであったわけだが、今回の一連の膨新聞に見られる、「封建的ファシズム独裁」、「家族的ブッショ」、「政治の私物化」等々の批判は、その文章上の激しさもさることながら、問題の本質を鋭く抉（えぐ）ったものであるといわねばならない。

しかも、こうした批判の奔流は、すでに決着事件にその萌芽があったとはいえ、中国民衆のあいだの抑制された自覚として潜在的には広く醸成してきたものであるがゆえに、今日の中国では「スったすぎず、当の中国民衆の意識や苦悩、さらには中国の政治文化とは著しく乖離（かい）したものであったといわねばならない。

だが一方の毛沢東政治は、たんにその客観的な体質のみならず、より根本的には、中国社会における争点や葛藤が、中国の最近の躍新聞の表現を借りれば、まさに「社会主義的民主」の制度的保証によって溜飲されるという統治のメカニズムを欠き、一種の道徳主義的な大衆の教化を伴って著しくカリスマ化した権力構造のもとで、すべてが毛沢東個人の意向（しい）にゆだねられてきたところに問題があったのである。

こうした文脈において、毛沢東政治のユニークさは、権力闘争をつねに大衆運動化するという政治技術上の顕制でしかなかったという人的なものなのか、ペンクラブから協会への公式のものなのか、明確でない点もあり、三浦理事がペンクラブ側の真意を確かめたうえ、処理することになっていた。

この結果、申し入れが公式なものであることがわかり、理事会の方針どおり、研究会開催を断ったものです、経過報告は書記局報告の形式がとられ、了承された。

自明の問題点に盲目だった

だが、毛沢東神話に取り憑（つ）かれたわが国の多くの知識人は、ことに中国にかんするかぎり、このような自明の問題点にたいしてあまりにも盲目であった。この点では、イデオロギー的・党派的な毛沢東主義者よりも、多くの論壇時評者の言説に振らしただけで体制派詩人エフトシェンコの痛烈なアイロニーであったが、いまや

大いなる虚妄の文化大革命

それにしても、毛沢東政治の極限形態としての文化大革命は、まさに大いなる虚妄であったし、林彪の「自叙と没落」、「四人組」事件、華国鋒主席の権力掌握のパターンそれ自体が、毛沢東思想体制のもたらした過行現象の象徴的なあらわれであったわけだが、今回の一連の膨新聞に見られる、「封建的ファシズム独裁」、「家族的ブッショ」、「政治の私物化」等々の批判は、その文章上の激しさもさることながら、問題の本質を鋭く抉（えぐ）ったものであるといわねばならない。

しかも、こうした批判の奔流は、すでに決着事件にその萌芽があったとはいえ、中国民衆のあいだの抑制された自覚として潜在的には広く醸成してきたものであるがゆえに、今日の中国では「スターリン批判」のような衝撃的な偶像破壊は不必要だともいえよう。今日の事態はまた、胡愈の根源をすべて「四人組」に帰するという理不尽の破綻の証明でもあって、こうしてひとたび解禁された批判は、中国社会を必ずや方向づけてゆくであろう。

ところで、以上のような中国社会の方向性をとらえきれなかったばかりか、人類史の救済の種を毛沢東神話の世界に求めようとしたわが国の知識人がきわめて広範に輩出したことについて、有の現象ではなかったであろう。だが一方の毛沢東政治は、たんにその客観的な体質のみならず、より根本的には、中国社会における争点や葛藤が、中国の最近の躍新聞の表現を借りれば、まさに「社会主義的民主」の制度的保証によって溜飲されるという統治のメカニズムを欠き、一種の道徳主義的な大衆の教化を伴って著しくカリスマ化した権力構造のもとで、すべてが毛沢東個人の意向（しい）にゆだねられてきたところに問題があったのである。

こうした文脈において、毛沢東政治のユニークさは、権力闘争をつねに大衆運動化するという政治技術上の顕制でしかなかったという人的なものなのか、ペンクラブから協会への公式のものなのか、明確でない点もあり、三浦理事がペンクラブ側の真意を確かめたうえ、処理することになっていた。

この結果、申し入れが公式なものであることがわかり、理事会の方針どおり、研究会開催を断ったものです、経過報告は書記局報告の形式がとられ、了承された。

文芸家協会が断る

言論表現に関する合同研究会の設置

日本文芸家協会はこのほど開いた理事会で、先に日本ペンクラブから申し入れのあった「刑法改正」など言論表現に関して合同研究会開催について「情報交換はするが研究会設置には応じられない」との態度を明らかにした。

この申し入れは高橋健二・ペン会長から文芸家協会の三浦朱門理事に対し、書面でなされ、十一月理事会に諮られた。同協会としては、この問題については数年前に「改正は表現の自由の抑圧をもたらす恐れがあり、反対する」との小委員会報告を理事会が聞き置く、という形で研究済みとの観点から、研究会開催には応じられないとの態度を決めたが、書棚が個人的なものなのか、ペンクラブから協会への公式のものなのか、明確でない点もあり、三浦理事がペンクラブ側の真意を確かめたうえ、処理することになっていた。

この結果、申し入れが公式なものであることがわかり、理事会の方針どおり、研究会開催を断ったものです、経過報告は書記局報告の形式がとられ、了承された。

鏡にうつった自己像を磨く

しかし、中国革命の達成以来、わが国の多くの知識人にとって中国は、まさにみずからの思想の立脚点を映し出す鏡でもあったのだ。

人的なものなのか、ペンクラブから協会への公式のものなのか、明確でない点もあり、三浦理事がペンクラブ側の真意を確かめたうえ、処理することになっていた。

この結果、申し入れが公式なものであることがわかり、理事会の方針どおり、研究会開催を断ったものです、経過報告は書記局報告の形式がとられ、了承された。

自明の問題点に盲目だった

だが、毛沢東神話に取り憑（つ）かれたわが国の多くの知識人は、ことに中国にかんするかぎり、このような自明の問題点にたいしてあまりにも盲目であった。この点では、イデオロギー的・党派的な毛沢東主義者よりも、多くの論壇時評者の言説に振らしただけで体制派詩人エフトシェンコの痛烈なアイロニーであったが、いまや

黒板

後5時半、労音会館会議室（国電水道橋駅下車）で。中島幾代氏「ロマン・ロランの永遠の恋人」。会費四百円。主催・ロマン・ロラン協会（0422・22・2878）へ。

早大国語教育学会12月講演　9日午後1時半から、早大小野記念講堂で。築島裕氏「石山寺一切経の訓点について」ほか。問い合わせは同大教育学部川副研究室（03・203・4141）へ。

日本オリエント学会月例講演会　12日午後2時、東京大学教育学部仏教階ホール（地下鉄・淡路町下車）。松谷敏雄氏「東大イラン・イラク学術調査の成果」。無料。

第43回リコー三愛グループ公開講座　14日午前8時、銀座第一ホテル本館の間で。古谷雅樹氏「植物と環境保護」ほか。無料。申し込みは三愛会（03・541・4051）へ。

美術展

★佐藤利彦個展、比田井雅好自本画展　銀座8ノ8銀球堂ギャラリー（10日まで）

★大橋晃朗展　銀座7ノ10ギャルリーヴィヴァン（10日まで）

★朱楽会78受賞者選抜展　銀座8ノ9銀座アートギャラリー（10日まで）

★第9回十二月会日本画展　銀座7ノ8談会画廊（10日まで）

★大西黒個展　銀座7ノ11アテネ画廊アネックス（10日まで）

★江川鈴織日本画展　銀座7ノ10ギャラリーカノウ（10日まで）

★平沢貞通個展と戦後謀略資料展　新宿区西早稲田2ノ21戸塚画廊（20日まで）

★自由中宏や国屋画廊（12

★山川茂油賀店（12日ま

★ハニホス3ノ15椿近代

★木村鉄雄町13ノ16ギ

★第三十回盟展　銀座

★第9回個日動画廊本店

★立岩鉄展　画廊（20日ま

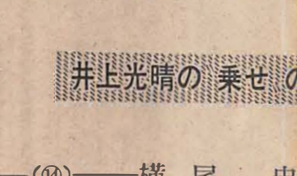
★いそべた8処屋画廊

★宮田雅之日本橋高島屋

★石井公彦3人展　銀日まで）

ルオー「蓮長の星」19

ぶやき、狂死した。パスカルを精神的師としたルオーは、キリスト不在の世界の悪徳、悲惨を告発し、それを通じてキリストの受難と愛を確かめ、その出現を願った二十世紀のすぐれた宗

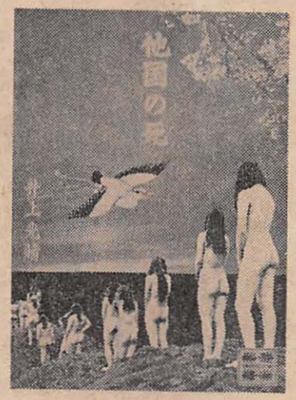


井上光晴氏

井上光晴の乗せの手

作家とばくとデザインと

横尾忠則——(14)



井上光晴「他国の死」（講談社）の装幀＝1973年作

井上光晴さんとの関わりはちょっと奇妙よ、枚数は何枚でもいいですよ、五枚でもというべきである。井上さんとのそもそもの出会いは九年前、小説を依頼された時から始まる。

当時、「デザイン批評」という雑誌に毎についてのエッセイを書いたのを井上さんが読まれて、ひとつぼくに小説を書かせてみようということで、井上光晴編集「辺境」に百枚近い小説を発表したが事の始まりであった。

一度も面識のない井上さんから電話があった時、ぼくは正直いって困り果ててしまった。ぼくは一応礼儀（？）としてお断りしたが、結局は勇気を出して引き受けてしまった。ぼくにはどうも感い癖（くせ）があって、不可能と思われるものになぜか挑戦（？）してしまうところがあるのだ。

「何でもいいんですよ、難しく考える必要ないんですよ、自分のこと書けばいいんですよ、お母さんのことだっていいじゃないですか、あなたは書けますよ、でなきゃわざわざお願いなどしませんよ、頼みますよ」

もなく、二度とこんな真似（まね）はすまいと心に誓ったにもかかわらず、最近再び井上さんの脅迫（？）によって賜の目を見ないことを祈りつつ二作目を書いてしまった。

井上さんと初めて逢（あ）ったのは実は昨年である。井上さんのことは瀬戸内晴美さんからよく聞いていたので、逢う前から親しみを抱いていたが、どうも小説が書いたことによって逆に近づきにくい存在になっていた。だが、ぼくの長男が井上さんと、それから瀬戸内さんとも同じ誕生日（五月十五日）であることから、何か因縁

〝不幸なおつき合い〟